

—サンプル—  
クリスマス特別コラボ  
篠崎×安西&キス・イン・ザ・ダーク

どこからか聞こえてくるクリスマスソング。

北川輝は、三崎と付き合い始めた頃のことを思い出しながら白杖を動かしていた。

幸せで胸はとっっても温かい。しかし、肌を刺すような冷風は現実だ。

(うう…：寒い寒い…：)

寒いと思うだけで身体がぶるつと震える。こんな日はゆっくり湯船に浸かりたい。三崎に抱えてもらいながらの入浴は身体だけでなく心までポカポカにしてくれる。

マンションのエントランスに入ると一気に暖かくなった。アパートに住んでいた頃は、部屋に入ってもなお外気と変わらぬ寒さだったのに。三崎には、心だけでなく生活面までガラリと変えてもらった。

(お風呂早く入りたい！)

しかし三崎の帰りを待たなければ。一人でも当然入れるが、三崎と一緒にの方が楽しいし、力を抜いて湯船に浸かることができる。それに滑りやすくなる入浴剤だつて入れられる。

「ただいまあ…：」

「おかえり」

「えっ」形式的に口にしただけの挨拶に返ってきた声に驚く。「隆司さん？ 帰ってたんですか」

聞いていた時間よりかなり早い。

握らせてもらった二の腕を頼りに廊下を歩く。

「夜の打ち合わせがなくなったんだ。連絡しようかと思ったんだが、歩いているときに電話を鳴らすのもなと思って。迎えに行ってもすれ違いになりそうだったから」

「あ、じゃあ帰宅したばかりですか」

リビングの中は、エアコンの音はするものものまだ暖まっではいなかった。リュックを下ろし、マフラーを外す。

「寒かっただろう。何か飲むか。風呂も今溜めてるよ」

「ありがとうございます。じゃあ先にお風呂にしようかな。一緒に——」

「もちろんそのつもりだ」

へへ、と顔がにやける。

「入浴剤、選んでもいいですか」

「一緒に行くよ」

洗面所に入ると、戸棚を開ける音がした。その間に念入りに手洗いとうがいをする。

「ゆずと桃、それからラベンダーに……」

「チョコレート、だめですか？ 先日おじいちゃんからいただいたやつ」

「じゃあそれにしようか」

「やった」

早く使いたかったのだが、匂いが気になって使えなかったのだ。しかし明日は三崎も輝も休み。身体から甘い匂いをさせていても問題はない。

「チョコレートの香りかあ、楽しみです。自分の身体だと匂いってわからなくなっちゃいますけど、隆司さんのだったら長く感じられるかな」

「食べてもいいか」

「え？ 入浴剤ですよ？」

「……そうだな」

疲れているのだろうか。

三崎は自ら甘いものを食べようとはしないけれど、輝に付き合って食べてくれることはある。徐々に甘党になってきたのかもしれない。

「僕まだ着替えてないし、買ってきましょうか、チョコレート」

「いらないよ。匂いだけでじゅうぶんだ」

くく略くく

篠崎×安西

(……ポテト食べたい)

無性にフライドポテトが食べたい。

安西は財布を手にとると、篠崎のこもる書齋を

ノックした。

「諒くん」

電話中ではなかったらしい。ドアを開けてくれた篠崎が、コーヒーを探すように安西の手元を見る。

「すみません、喉渴いてましたか」

「いや……買い物か」

「ちよつと、ポテトが食べたくて。じゃがいもを買いに行こうかなって」

「ポテトが食べたくてじゃがいも……？」

そうだ。ポテトではアメリカ出身の篠崎には通じない。いや、おそらく話題が唐突すぎたのだ。この場がファストフード店だったら通じていた。

「フライドポテトです。細く切って揚げたやつ」

「フレンチフライか」

「たぶんそれです」

「そうだな、ポテトだ。で、……ポテトを買いうんじやないのか」

篠崎らしい返答に笑う。

「ポテトを作るためにじゃがいもを買いうんですよ」

「ポテトを買いえばいいんじゃないのか」

「……じゃあ、僕が店で一人でポテトを食べてきたらいいんですか。篠崎にあらんで食べさせてもらおうと思ったのに」

今思いついた言葉だった。しかし効果はてきめんだったようで、篠崎がさっと書斎に入る。

「篠崎？」

「俺も行く」

篠崎がマウスを操作する。パソコンの画面が消えた。

「え？」

「諒くん一人では重いだろう」

「……僕、そんなにたくさん食べませんけど」

篠崎の頭の中には、ポテトを大量に食べる友人たちの姿でも浮かんでいるのだろう。アメリカ人の大食いは見えていて楽しいが、自分に置き換えるとそれだけで胃もたれがする。

けれど、篠崎と買い物に行けるのは嬉しかった。

(篠崎にもらったコート、着ていこう)

「いくらでも食べさせるよ。抱っこにしよう。映画も見ようか。つけるのはケチャップがいいか」

「そんなには食べませんよ」

「遠慮するな。珍しい諒くんからのおねだりだからな」

どうやら、とても楽しみらしい。最近、そんなに甘えていなかっただろうか。しかし夜は今も寝かしつけをもらっている。昨夜だって抱きしめてもらい、頭を撫でられながら眠りについた。

「ちなみに僕はケチャップはつけません。っていうか、せつかなのでコンソメ味にしようかなと」

「ほう……それはいいな」

篠崎が車を駐車場に止めた。有名な高級車だ。ちらちらと視線を浴びる。

(うう……恥ずかしい……)

篠崎が運転席から降りると、車を見ていた人たちの顔が「おお……！」と納得の表情になる。しかし安西が助手席から姿を現すと、「え……？」となる——ような気がする。特に若い女性はそうだ。

しかし、篠崎はそれらを気にしたことは一度もなかった。車を降りるとすぐに身体ごと安西の方を向く。

「買うものはじゃがいもだけか」

「ついでに、いいものがあれば買いたいです」

「いいもの？」

「特売とか見切り品とか」

「そうか」

絶対にわかっていない。けれどそれが篠崎らしい。

車を降りると冷気に体がぶるつと震えた。普段、一人のときなら足早に店内に逃げ込む。けれど篠崎が一緒だと、季節を感じられていいな、なんて思うから単純だ。

「今夜のご飯、何にしましょうか。食べたいものはないですか」

「フレンチフライ」

笑いながら店先に向かう。

「それはおやつです。ちなみに油が余るので、揚

げ物から選んでもらえると助かります。連続で油物になりますけど」

「かまわないよ。それなら諒くんの唐揚げが食べたい」

「わかりました。じゃあキャベツとトマトも買いましょう」

十メートルほど先に白杖を持った男性が見えた。細身でまだ若そうだが、慣れているのか、安西たちと同じようなペースで歩いている。

(器用だなあ……)

慣れもあるのだろうが、自分には絶対にできない。もし今病気などで失明したら、きつと引きこもりになってしまうだろう。

背後からタタタッと軽い足音が聞こえた。振り向くと、安西の横ぎりぎりのところを子どもが走り抜けていく。危ないなと顔を正面に戻したとき、子どもが白杖の男性にぶつかった。

「うあっ！」

不意打ちだったからか、男性の身体が前に傾く。安西と同時に、隣で篠崎も駆け出していた。

子どもが振り返りもせずには逃げていく。

「こら！」

子どもの背中に叱りながら、男性に駆け寄る。

男性は手で地面を触っていた。何か落としたのだろうか。

「大丈夫ですか！」

しかし男性の反応はない。話しかけている相手が誰だかわかるよう、指先でそっと男性の肩に触れる。

「あの、おケガはありませんか」

「あ……すみません」

顔を上げた男性は目を閉じていた。全盲なのだろうか。

「痛いところはありますか。立てますか」

「は、はい……」

どうやら何が起きたのかわかっていないらしい。立ち上がろうとする男性の腕を取り、身体を支える。

「子どもが走ってぶつかったんです。そのまま逃げちゃいましたけど」

「あ、そうでしたか……」

「手に持っていた荷物とかは大丈夫ですか」

ストラップがついているので、白杖は飛んではいかなかったようだ。背中にはリュック。しかしさつき、地面をぺたぺたと触れていた。

「落とし物とか」

「いえ、大丈夫です。白杖も折れてないようです。ただ、方向がわからなくて」

その手は擦りむけ、血がにじんでいた。

「方向は後でお伝えします。それより、手、ケガされてますよ」

— サンプル —  
クリスマス特別コラボ  
篠崎×安西&キス・イン・ザ・ダーク

©goneone (ゝーわんわん)

2023/ 12/ 30

メール: goneonegoneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter: @goneone11

本書の無断複写・転載・複製を禁じます。

※この作品はフィクションです。

実在する人物、団体等とは一切関係ありません。

— サンプル — クリスマス特別コラボ  
篠崎×安西&キス・イン・ザ・ダーク